

論文の内容の要旨

論文題目： ベルクソン哲学における秩序生成の諸相

氏名： 谷口 薫 (たにぐち かおる)

従来教科書的解釈では、ベルクソン哲学とは、生の哲学であり、生命の創造性を主題とするものであるとされてきた。分析的な認識や空間的記号の使用などの、私達が通る直観や持続の仕方は、彼ら哲学の本来の主題である。直観に即してこれや、単なる解題を改め、その目的は、歪曲の陰影を消すことにある。正確に捉え返すこと、これが本論文を貫く問題意識である。本論文の考察は、固定化された秩序の生成や認識の動的な記号を用いて現象を構成する知性も、秩序の反復的再認を考察し進める。私達が通常持っている一般的なものを再認することによって成立している認識も、私達の日常の中で秩序を再認する認識、実践的な関心の下で世界を秩序立てて捉えている認識も、丁寧に読み解いていくことで、一方で私達のなすさまざまな理解が形式的で限界を持つものを確認させてくれる。他方で、私達の理解が単なる形式や不動の反復には留まらず、考察の背景として、科学の意義について激しい論争が巻き起こった19世紀のフランスの思想状況を認識する。いわゆる「新哲学論争」のただ中において、ベルクソンはどのような位置づけにあったのか。当時、ベルクソンは反科学の側面のみならず、科学の側面でもあり、科学批判論でもあり、科学の擁護論でもあり、科学の射程と限界の慎重な画定である。彼は科学にも一定の有効性を当然認めていた。ベルクソンの批判は、科学そのものというより、科学にその限界を超えた能力を認める主張に対して向けられたものである。秩序や分析的認識の有効性と限界について、一面的にはくみとりきれない彼の思考の難しさをよく示したものである。

秩序生成の諸相を考察する本論文では、知覚、知性、自然、仮構機能、静的宗教など、ベルクソン哲学においては、どちらかといえば創造とは異なる質のもの、創造を見失わせるものとして論じられたはたきや場面ばかりを取り上げて、考察を進めて行く。

第一章では、私達のあらゆる活動の基盤になっている知覚の成立について考察する。ベルクソンの知覚の議論には、二義的な側面がある。彼は、知覚が、行動の関心によって構成されるもの(言ってみれば、人為的に作り出された秩序)である一方、直観と同様に実在を捉えることができる(言ってみれば、もちろん、直観とは異なる)知覚が、知覚が実在を捉えることにはできないが、少なくとも実在の一部を捉えることができるのである。そこで、知覚が実在を捉えるとはいかなる仕方によってか、またその限界がどこにあるのかという問題について検討する。

第二章では再認と知覚について考察する。知覚が行動の関心によって構成されるというベルクソンの主張について、彼が身体的再認の事例について論じている箇所を参照しつつ検討する。身体的再認とは、はじめは意識的対象としていた運動が、習慣化することで自動化するという現象である。身体運動の自動化と相即的に、運動の対象の再認も自動化されていく。これはある意味、新たな知覚認識の成立と言ってしまう現象であり、知覚場が人為的に作り出された秩序であるという側面とともにクローズアップされるような場面である。そうした場面について検討することで、そうした人為的秩序である知覚が、それでも実在の一部を捉えているといえるのかどうかという点について検討したい。またこの章では、身体的再認による秩序づけと、本能による秩序づけを対比することで、身体的再認が、人間的知性の働きを待ってはじめて可能になるものであることも確認する。言語による思考の本質は、例えば、身体をもつてはたかきかれない存在の対代理として記号を操作することで、実際にその対象を操作したらどうなるかをシミュレートしてみることである。先に示したように、知性が生み出す新たな行動パターンは、既存の身体的習慣の組み換えによって作られる新たな記号を自ら生み出し、自己を発展させ、自らを重ね、自らの思考を展開していく。数学や論理学は、記号に対する行動という特殊な行動領域の典型である。だが、記号使用に過度に依存する思考は、時に具体的な行動から遊離し、夢想に耽り、やがて自ら構築した記号体系を現実そのものと取り違えることになる。これこそが、ベルクソンの知性批判の眼目なのである。

第三章では、第二章での議論を受けて、知性について論じる。序章ですでに触れた通り、科学的認識については簡単に論じてきたが、第三章ではまず、科学的認識という形で成熟していく知性的認識が、本来は知覚や素本能と同様に行動の関心によって構成された秩序であるという点を確認する。知性は、既知の固定的な要素を運動を再構成しようとする点で創造的運動を取り逃がしてしまう。しかし、自らの行動とその対象の関係を意識にのぼらせ、自らの行動として統制して行く知性は、未来の行動を計画するものであり、そのため不在の対象を操作することは可能なはずである。知性の特徴は、ベルクソンは道具の製作と記号の使用に見出した。道具の製作とは「機械」のように既にその部品の組み合わせによって求められる運動を構成するということがある。また、記号の使用は、代理のための判明で扱いやすい表象をただ代替するという役割のためだけに使うという特殊な態度を生み出すことになる。いずれの場合も、知性の特徴となるのは、眼前の行動や状況から離れて、自らと自らを取り巻く状況を反省的に捉え、自らも異質なものを捉えるというはたらき方、意識を必然的に自覚させ、活性化させる点である。直観は直接的で無媒介な把握であるが、その直観へと向かう最初の一步となる意識の覚醒には知性の発揮が大きく寄与することになる。けれども知性の限界は、それが求める行動の動機自体を自らは決して与えることが出来ない点にある。知性は動機となる感情が到来した時に適切な

行動を組み立てること、与えられた枠組みの中で行動を精緻化することに威力を発揮するはたらきなのである。

さらに第四章では、知性を象徴する道具の製作と一見似ているようで異なる二つの活動として、仮構機能と芸術の創作についても考察してきた。

仮構機能は、知識や行動に関わるのではなく、事象の背後に「人格的」な存在を仮定することで知性を見出す機械論的なメカニズムとは異なる「心情的」な秩序を見出す。知性が与える機械論的な説明は、ものごとを反復的に再構成するには役立つが、不安や恐怖、エゴイズムの暴走など、私達の行動を左右するような感情の力に対して無力である。

芸術の創作は全く異なる性質を持つ。芸術は、何か有用な結果を獲得するための産出ではなく、創造を突き動かしている感情の動きそのものへの一致であり、感情の直接の実現である。芸術は、直観に似て、もはや行動の有用性に縛られない芸術家によってのみ可能な創作であるが、私達に感情の共有を可能にすることあっても、行動の場面を離れたまま再び私達の行動を導く力を多くの場合与えない。直観は、人格による自由な行為として結実し、新たな切望を生み出すのである。直観は再び行動の場面に立ち戻り、新たな秩序の創造へと向かう。決まった結果、決まった目的、決まった手順などにもはや縛られない仕方、直観が異質なレベルへと自らを射し込み続けることがそのまま絶え間ない創造の展開となる。

こうして、私達にはさまざまな仕方、既存の行動を脱し、既存の行動の関心から離れることで、既存の見方では見えていなかったものを新たに見出すはたらきと方法が与えられている。既存の枠組みを反復することの中で、その枠組みから離れるに至り、新しい行動の枠組みを獲得し、新たな生の在り方を導いて行くことが、まさに生命の姿である。そこに私達は、従来の哲学が重視してきた自由意志や合理性を逃れる、新しい哲学の可能性を見出すことが出来るだろう。